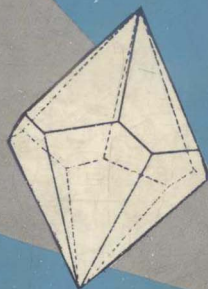


プルメリアの木陰に

渡辺喜恵子



渡辺喜恵子

© Kieko Watanabe, 1974 Printed in Japan

ブルメリアの木陰に

一九七四年一月二〇日 発行
一九七四年七月二〇日 三刷

定 価／七五〇円

著 者／渡辺喜恵子

発行者／佐藤亮一

印刷所／東洋印刷株式会社
製本所／株式会社大進堂

発行所／株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話（業務部）二六六一五一
（編集部）〇三〇二六六一五四一一

郵便番号 一六二
振替 東京八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ブルメリアの木陰に■目次

航路	5
賭け	33
写真花嫁	53
火の島	68
コナの月	82
珈琲村	111
アロハオエ	128
母となる日	154
ヒロの朝夕	186
女の戦さ	204
日本語学校	226
翡翠	240
生命ある限り	261

装
幀
野
中
ユ
リ

プ
ル
メ
リ
ア
の
木
陰
に

航 路

大正七年十二月、風は冷たかったがその日の空には一片の雲もなく、抜けるような蒼さで晴れ渡った。船出には絶好の日和である。

見送る人も見送られる人も浮きうきと足どりも軽やかに、棧橋を往き来して笑いさざめく声まで小気味よく響く。もう間もなく、多くの人間と荷物を積み込んだアメリカ通いの春洋丸は、横浜港の岸壁を離れようとしているのだ。

幾分西に傾き出した太陽は金色を帯びて華やき、午後三時、とうとう別れを告げる最後の銅鑼が船首から鳴り響くと、船はあわただしく錨を揚げた。甲板から五色のテープが乱れ飛ぶ。

どよめくバンザイと人の波、高々と帽子を振り、ハンカチを振る人の波、船は次第に岸を離れ、やがて向きを変えた。別れを惜しむ人影も小さくなって、やがて誰が誰やらわからなくなると棧橋の人影も点々と散って行った。白い波間に、何もかも、見るみる遠くなってゆく。船旅に馴れた人も、はじめて旅に出た人も、別離の興奮からさめきれず、いつまでも甲板に立ち尽した。船は速力を増し、襟許を吹きすぎる風も刃物のように冷たくなった。

東京湾を抜けた春洋丸は夜の明けぬうちに黒潮にのり、金華山沖から航路を東北に向けてまっ

しぐら、太平洋の真ん中へと突き進んだ。

三日目にはもう船のどの舷からも陸は見えなくなった。その三日目に、春洋丸はひどい濃霧に襲われ、天候は次第に荒模様と変った。雨を含んだ風は勢力を強め、空も海も唯一色の、灰色の厚い層に塗り込められた。しきりにあとを追う海鳥も船を見失ったのか、もう従いて来ない。いったん荒れ出すと十二月の海は昏く、陰惨である。日増しに激しく狂った。船と巨浪との闘争が幾日も幾日もつづいた。

春洋丸は移民輸送船の異名を持った東洋汽船の誇る天洋丸の姉妹船で、豪華な二万二千トンの新造船である。めったなことでは転覆する筈もないが、狂瀾怒濤の太平洋を怖れげもなく進むたのもしさに身を任せながら船揺れがあまりひどくなると、一等船客も二等船客も生きた心地がしなくなり、歯をくいしばって、ベッドを降り、床の絨氈を転げながら、一心に神仏に助けを求めつづけた。通風の悪い三等船客は、いっそう惨めだった。

ペンキの臭いが鼻につき、重油の臭いが胸をむかつかせる。體^すえた人間の体臭にからんで絶えず誰かが吐き出す汚物の臭気が船底によどみ、重苦しく揺れるのだ。息がつまりそうになると男達は衣類を掻きむしっては胸をはだけ、水揚げされた魚のようにあえいだ。

閉じこめられたこの状態がこのまま一週間も続いたなら、どんな辛抱強い人間でも発狂してしまうだろう。船底の中央は揺れが少ない代りにエンジンの響きに悩まされ通しだったし、船尾は揺れが激しい。カーテンで仕切られた右側の四段ベッドを占領していたのは、ホノルルへ上陸する二十八人の女達であった。

二十八人は写真花嫁とよばれた一団で、ごく若い女達ばかりだった。移民会社から派遣された四十年配の、頭の天辺の薄くなりかけた付添人が時折覗きにくるが、女達は船に馴れない者から順に、たべものが咽喉を通らず、二人三人とへばっていった。

髪を振り乱してベッドから転げ落ち、そのまま通路へ坐り込んで動けずにいる者もいた。

「死にたいって、しっかりおしよ。そんな甘っちょろい氣持でいるから船に酔うんだ。どんな漁師だって一人前になるまでには、なんども血反吐をヘドはくんだってよ。なにサ、これしきの時化で」

唾をベッベッと吐きながら平氣で飯を食う威勢のいい女もいた。

「意久地なし奴が、げエげエやりあがつてさ、妊み女じゃあるまいし、いい加減にしておくれよ。こっちは飯を食っているんだからねエ、ちいたア遠慮してもらいたいネ、氣色悪いったらありしない」

怒鳴られて一日中、しくしく泣いてばかりいる女もいた。そのすすり泣きが耳について苛ら立つのである。些細なことにも腹を立て噛みつくように怒鳴る女もいる。

横浜港を出航してから八日経った。春洋丸はどうやら無事暴風雨圈を脱出したようだ。思いのまま、猛威をふるった風も雨も、九日目の明け方から次第に遠退きつつあった。長い時間をかけて、船は根氣よく闘ったものである。

虚脱したような海原を、船はゆっくりゆっくり進んだ。やっと乗り切ったんだ。そんな感じだった。静かだった。まったく静かだった。一体どれだけ遠くへ来てしまったのだろう。氣温はぐんぐん上昇しはじめた。船底の腐敗した空氣は忽ち蒸れ出し、地獄の釜ゆでを思わせた。暴風雨が残した余波であろうか、しーんと静かになったかと思うと、思い出したように船は、横に斜めにかしぎ、寝ている女達をベッドごと持ち上げては、すとーんすとーんと落す悪戯を執拗に繰り返すのだ。海が静かなだけに、それはなんともいわれぬ氣分の悪さだった。みぞおちの辺りを鷲掴みにされるようで、耳のつけ根が寒くなり、あぶら汗がしたたかに流れる。

眠れない女達の争いがまた始まった。

「なんじゃ、お前なんかずうずう弁のくせに、出しやばんなヨ」

美穂はびくっと身を起した。ずうずう弁と嘲笑されたのは上田たまきにちがいない。せせら嘲うのは広島県の女達のようなだ。浜育ちであろうか、言葉遣いも荒いが、声も囁れていた。

熊本的女と広島的女達は乗船以来絶えず小競り合いをやつて来た。どちらへも加勢してはならない。だが、ずうずう弁は引込んでいろと嘲笑されれば、たまきも引込みがつかないのであろう。「ずうずう弁で悪かったッ、だども、真夜中まで広島弁でガヤガヤやられては、こっちだっていい迷惑だ」

怒鳴り返すたまきの声はびっくりするほど大きかった。取っ組あいの喧嘩になるかと思われたが、間もなく誰かが割って入ったようだ。直きに騒ぎは納まった。

美穂は吻つとして、狭い蚕棚のようなベッドの小さな枕に頬を押しつけたが眠れなかった。他の二十七人の女達も同じことだろう。眠れないなら、いっそのこと早く朝が来てほしい。甲板に出て、少しでも新鮮な空気が吸いたかった。冷たい水が飲みたい。汲みたての井戸水を、ごくごく咽喉を鳴らして飲みたかった。ごくごく冷たい水を――。突如エンジンの響きが高まり、体中が小刻みに震え出した。胃袋が押し上げられる。手足を海老のように縮めた美穂は枕許の手拭いを慌てて口中へ押し込んだ。

ゆるく大きく船が揺れ、またしてもすとーん、すとーんと堕ちてゆく。意識が遠くなつてゆく。吐くものはもうなんにもない筈なのに、それでも黄色い水が咬えた手拭いを染めた。体中熱っぽく涙も熱い。熱い涙が止めどもなく目尻にあふれて頬を濡らした。

姉さん――姉は冷やかに、

「お前だって、いつかは必ず故郷が恋しくなるんだえ」

と言った。たった二人きりになってしまった姉妹なのに、よくも故郷を捨てて海を渡る氣になつたものだ、姉が言つた。その姉の顔が、闇の中にぽっかり浮ぶ。姉さん――。

こめかみを這うねばつこい汗が首すじを伝わつて氣持悪くみぞおちを流れる。何度も寝返つた。風も雨も、遠く去り、もうすっかり夜が明けかかつてから美穂は深い眠りに入つたようだ。

「さアめしだ。めしだヨ」

シナ人のコックが、甲高く叫ぶ声で眼を醒したが、まったく食欲は感じられなかった。女達がベッドをきしませて身仕度をはじめても美穂は起き上る氣力もなかった。

「少しは食べんと、体が持たないからねエ」

枕辺の近くで励まし合う声を夢うつつに聴いた。カーテンで仕切られた通路の向うが食堂になつていて、食器のふれあう音がする。

船の食事は不味かつた。シナ人のつくるシナめしは油こくて、船酔いの女達の胃袋にこたえた。口に馴れた熱い味噌汁や塩っぱい漬物が恋しかつた。水、水、みず、冷たい汲みたての水が欲しい！ 美穂は再び、死んだように眠りの淵にふかく堕ちていった。

一体どのくらい眠つたのであろう。頭が痺れ、軀のどこかにぽかっと穴があいたように眼が覚めた。手も足もだるく、上体を起しても、波間に浮くクラゲのようにたよりなかった。もう日暮が間近いようにも思われる。一体ここは何処ら辺なのだろう。女達の話声が少しも聴えて来ない。カーテンを引く氣にもなれなかつた。

物憂く、額に乱れかかる前髪を指で搔き上げ、ピンを抜いて束髪の髻を解いてみた。櫛を入れたら少しはさっぱりするのかもしれない。だが、長く梳かず、汗に汚れた髪は濡れた昆布のようで氣色が悪かつた。あきらめてそのままピンで止め直すと、ついでにその汗臭い肌着を替えてみ

た。ぐずぐずになった帯を締め直し、美穂はふらつく足で後甲板へ出た。女達はあちこちに屯して盛んに喋っている。昨日までの女達とは打って変り、頬に血の氣がさして活き活きと、笑い声まではじけるようだ。

急に明るみへ出た美穂は眩しくて長く眼をあいていられなかった。軽く臉をとじ、笑い声の方に向って深呼吸を試みた。なんとうまい空氣だろう。

甲板に吹く潮風は生ぬるく、急に夏を迎えたような陽氣だった。羽織を脱ぎ捨てた女達が、はしたない程はしゃぐのはそのせいかもしれない。もうハワイに近いのだろうか。まるで夏だ。甲板で働いている船員達も白ズボンに穿き替えていた。白いズボンを穿くと動作も敏捷になるのか、きびきびと動き廻っている。まだよく視点の定まらぬ眼を細めながら美穂は、手摺りに掴まってそろそろ歩いてみた。

どっちを見ても海以外に何も見えず、大海原の真っ唯中を、船はさまよっているのではないかと眼をこすったが、船脚は快調で、灰色の霞のかかった空は、海との境界線を澄んだ水色に替えてしまっている。

次第に西の空はオレンジ色を増した。なんと美しい空だろう。雲を突き抜ける光、広い空と、海も大きく変化をみせはじめた。眼下の海は紺青を深めて幾分暗いが、いくら眺めても飽きるといふことがない。飛び込みたくなるような不思議な青さだった。

日本はもう遠くなってしまったのだ。日本の海とは違ふ。美穂は指を折って数えてみる。今日で九日、順調なら十一日で船はホノルル港へ入るときいている。予定どおり船が走っているなら、あと二日で船を降りることが出来るのだ。そして郷里を出てからもう半月、姉はまだ怒っているのだろうか。本当に怒っているのだろうか。積み重ねた麻縄の陰へ身を隠すようにして、美穂は思わず膝を突いた。

私は姉を裏切ったことになるのだろうか――。膝にのせた黒い絹のレース糸で編んだ合財袋から美穂は一枚の写真を取り出し、じいっと覗めた。

野中菊治、三十六歳。一体この人はなんだろう。どういう人なんだろう。たった一枚の、この写真をたよりに死ぬほどの船酔いに苦しみながらはるばる海を渡り、たった一人の姉にも背いて、この人に何を求めて自分は結婚の決意をしてしまったのだろうか。

冒険のない人生はつまらないと言い張り、姉の反対を押し切って故郷を出て来た自分を、この人は、野中菊治はどう受け止めてくれるのだろうか。自分は間違っているのだろうか。取り返しのつかないことをしてしまったのだろうか――。写真の野中菊治は涼しい眼許に微笑を浮べて何も答えない。美穂の心は頼りなさでいっぱいになった。

年齢三十六歳。年を取りすぎているよと姉は言った。まだ一度も逢ったことのないこの人が自分のこれからの運命を握る夫になるなどと、どうして信じられよう。信じられないことを、いま自分は無理にも信じようとしているのだ。

美穂は二十三歳、まだ若く充分に美しい。何もハワイまで行かなくともこれからどんなによい縁談に巡り合えるかも知れないのに、第一、相手が三十六歳では年齢が開きすぎる。そうじゃないか、その年まで独身でいる男なんて、何をしているか、わかったもんじゃないよと、姉は反対だった。

もともとこの縁談は、ハワイへ行った叔父の取り持ちで、姉に申し込まれたものなのだ。姉の妙が十三歳、末っ子の美穂は三つで両親を亡くした。姉妹の間に、美穂にとっては兄の新太郎がおり、その頃はまだ元気だった祖母と二人で妙は母代りに、幼い弟妹の面倒を見なければならなかった。なりも振りもなく娘盛りを過し、いつの間にか婚期を失った。

松永家は代々、伊達藩の白石に住み、片倉家に仕えた侍筋の家柄だという。しかし、美穂が物心ついた時分には刀一振あったわけでもなく、だだっ広く古ぼけた家と、僅かばかり残された田畑を耕せばやっと飢えから逃れられるといった程度の苦しい生活であった。

新太郎が小学校を卒えたのを機会にその僅かばかりの田畑と家屋敷を売り払い、一家は盛岡へ移った。祖母の生国が盛岡であったからだ。祖母が娘の頃に御維新の騒ぎがあって、秋田戦争に負けた南部藩は、二十万石から十三万石に減らされ、隣藩の白石へお国替えになったのだ。先祖の土地を捨てても藩士達は転封命令に従うしかなかったという。転封命令は僅か半年で解かれ、藩士達も又国元へ引揚げたが、祖母は縁あって白石藩の松永家へ嫁いだ。娘時代の祖母はどんな気持で松永家へ嫁いだのか、老年になるとしきりに盛岡を恋しがった。妙も弟の教育のために、盛岡へ僅かばかりの縁故をたよる気になったようだ。

妙は勝気な娘だった。白石には頼りにする親類縁者を持たなかったし、勝気で通さなければ生きてゆけそうもない境遇だった。盛岡の、祖母の親類縁者の世話で中津川のほとりに小さな荒ら家を借り、新太郎を中学校へ通わせた。

家屋敷を売った僅かばかりの貯えはあったが、妙は弟の学資を得るために骨身惜しまず働きつづけなければならなかった。昼は行商に歩き、夜はランプの芯を細くして針仕事に励んだ。士族のむすめだという誇りが妙の心を支えていたのかもしれない。他家へ嫁ぐなどということは夢にも考えていないふうであった。

四つ年下の新太郎は、そんな姉に頭が上らず、姉の前ではいつも小さくなって勉強に励んだ。美穂自身も姉の愛に縛られて意久地なく生きて来たような気がする。新太郎が中学校を出た年に祖母は死んだ。

中学校を出た新太郎は姉の希望通り東京の大学へ進み、代って美穂が女学校へ上った。姉にと

って、この時代がいちばん苦勞の多かった頃と思われるが、氣持に張りのあった時代ともいえるのだ。貯金はみな使い果したし親戚中、頭を下げて借金に廻ったのもこの頃である。

大学を出た新太郎は盛岡へ戻らず、東京で就職し、これからの出世がたのしみというときになつて病死した。死んでから、姉にもいわず妻帯していたことがわかり、姉は新太郎の遺骨と一緒に、乳離れしたばかりの甥を抱いて帰つたのだ。

「この子を引取らねあ、女が困るだろう」

新太郎の嫁はどんな女か、姉は何も言わなかった。

小さな甥は禎吉といった。氣落ちしたのであるうか、姉はげっそりと痩せ細り、眼を窪ませて禎吉を育てた。姉の苦闘はまた出発点に戻つたのだ。授業料にも困りながら姉の叱咤激励で女学校を卒えた美穂は、遊んでもおられず小学校の代用教員の口を見付けて働いていたが、兄の死は、姉の妙とは違ふ意味での大きな衝撃だった。

夢も希望も打ちのめされた氣持で、美穂の代用教員の生活がつづいた。十二円の月給が、三人の生活を支えてゆく唯一の収入となつたからだ。それまで快く姉妹の面倒を見てくれた親類縁者も、新太郎が死んだとなると、ただの厄介者としか眼に映らぬようだ。

なぜだろう。つましく男の出世をたのしみに生きてゆくのが、それほどいいことなのだろうか、女の生きる道はそれしかないのだろうか——。弟の死を思い出しては愚痴っぽくなる姉に、美穂は反抗せずにはいられない。禎吉なんか連れて帰らなければよかったのだ。姉だつて嫁に行つたらしいのだ。このままでは、自分達の前にどんな人生が展けるというのだろう。

「誰のおかげで女学校まで行けたんだ——」

真剣に思い詰める美穂に跳ね返ってくる姉の言葉は恨みっぽく、美穂は眼を伏せて黙りこくるしかない。

色あせた袴、継ぎ接ぎだらけの白足袋、そんな惨めな姿をした代用教員に誰が結婚を申し込むのだろう。お前は先生だからと姉は言うが、禎吉の手をひいて、木綿の反物を行商に歩く姉と、どれほどの違いがあるというのだろう。三十過ぎた姉は、禎吉の将来に備えて、少しずつ貯金をふやしてやるのが、何よりの生き甲斐となった。誰のため大学へ行けた——姉は一生涯、それを叫びつづけるために生きているのだろうか、何もかも虚しくて、美穂は禎吉が可哀そうでならなかった。

ハワイの叔父から大金が送られて来たのはそんなときだった。

亡くなった父の弟、松永信夫は明治二十二年に官約移民としてハワイへ渡ったことは祖母に聴かされていたが、音沙汰もなく、生きているものか、死んでいるのか、それさえわからなくなっていたのだ。

叔父は数え年十八歳でハワイへ渡ったという。大きな夢を抱いて海を渡って行ったにちがいない。志を得なかったのであろうか、不憫な奴だったと祖母はよく涙を流して海外へ出て行った息子の思い出を語り、生きていれば今年は幾つになったと指折り数えていたのを美穂もよくおぼえている。

美穂が生れる前に叔父は生家を出てしまったのだが、姉の妙は五歳で、この叔父が大好きであったという。新太郎は生れたばかりであった。

二十七年振りで叔父の便りを得た姉は狂気して喜び、お祖母さんの生きているうちにこの便りがほしかったと、仏壇の前で泣き伏し、手紙を抱きしめたままいつまでも泣き止まなかった。

姉は叔父の送ってくれた金で、手放した故郷の家屋敷を買い戻すことを考えた。松永家の再興に奔走し、失った田畑を買い戻すことに成功した。叔父の手紙にそうしろと書いてあったわけではなかったが、禎吉のためにも、叔父のためにもそうすることが一番いいことだと妙は信じて疑